

## 『唐物語』の複合動詞語彙

岡野幸夫

### 一、はじめに

本稿は、一二世紀中末期に成立したとされる『唐物語』の複合動詞語彙の構成を概観し、また個々の複合動詞について検討するものである。これにより、複合動詞語彙の史的研究を行う一階梯とする。具体的には、①平安時代の文献に現れる複合動詞語彙との一致度はどのくらいか、②鎌倉時代前半の文献に現れる複合動詞語彙との一致度はどのくらいか、について検討することにより、『唐物語』の複合動詞語彙を、時代や文章ジャンルといった観点から考察する。また、個々の複合動詞について、問題となるいくつかの語例を検討し、時代や文章ジャンルによる相違を考察する。

『唐物語』を対象にした理由は、まず、成立年代が平安時代と鎌倉時代の境界付近であり、どのような時代的特徴が表れるのかという点、また、文章ジャンルとしても、「説話」と捉えられたり「歌

物語集」と捉えられたりするなど、評価が一定せず、典拠となる中国文献の翻訳の問題とも関わるため、どのような複合動詞語彙が用いられているかという点に、複合動詞語彙の史的研究上の課題があると考えたからである。<sup>註1)</sup>

「複合動詞」の定義は、「動詞連用形に動詞が下接して文法上一語を成すもの」とする。複数（多くは二語）の動詞を組み合わせるところから、作者やジャンル、時代による特徴が現れやすいのではないかという期待がある。

### 二、『唐物語』の複合動詞語彙の構成

用例採集には池田（一九七五）を用いた。同書の底本は尊経閣文庫本（A類本）、対校本は宮内庁書陵部本（B類本）と清水浜臣校板本（C類本）である。同書の見出し語を通覧して若干の補訂を行い、三本で合計二六七語（延べ三九二語）の複合動詞を得た。

これを、東辻他(二〇〇三)を用いて、平安時代の文献に用いられるもの(A類)とそうでないもの(B類)とに分類した。さらに、A類については、①平安時代の文献にジャンルの別なく用いられるか、②物語・日記・和歌の文献だけに用いられるか、③説話の文献だけに用いられるか、という観点から細分した。

比較として、他の鎌倉時代の文献のいくつかにについても同様に、刊行されている語彙索引を用いて複合動詞を収集し、分類した結果を(表一)に示す(表中の数値は異なり語数、括弧内は百分率)。なお、『今物語』は三木(一九九八)の本文を通読して収集した。

ここで、(表一)の考察に資するため、平安時代に成立した二十二の文献について、言語量と複合動詞語彙の一致度との関係を、ごく簡単に調査した結果を述べる。

文献の言語量については、岩波日本古典文学大系(旧版)の頁数を目安とした。また、複合動詞語彙の他文献との一致度については、東辻他(二〇〇三)のデータを用いて算出した。結果を(表二)に示す。この表では、文献の言語量の大きい順に配列している。この表からは、『源氏物語』『今昔物語集』といった、規模の大きい文献を除けば、用いられる複合動詞の一致度は、概ね八〇%前後であることが分かる。

以上をふまえて(表一)について検討する。

第一に、平安時代の文献との一致度はどうか、という点に注目す

ると、今回調査した文献は以下の二群に分けられる。まず、一致度が高いもの。これは「唐物語」「宇治拾遺物語」「方丈記」「今物語」が当てはまる。(表一)のA類の「小計」欄を見ると、これらの文献ではいずれも八〇%前後の一致度になっている。この数値は、(表二)で平安時代の文献同士で算出した一致度の平均に近く、鎌倉時代においてもこの数値を示すということは、平安時代の文献との一致度が高いということを示すものである。これらの文献は、成立年代や文章ジャンルの点からは、明確な共通点を見出しがたいが、少なくとも、平安時代の文献と同程度の一致度を持っている点で、他の文献とは異なる一群をなすものと考ええる。次に、一致度が低いもの。これは「水鏡」「無名抄」「平治物語」「十訓抄」「古今著聞集」「撰集抄」が当てはまる。これらの文献ではいずれも七〇%前後の一致度になっている。これらの文献は、文章ジャンルとしては歴史物語・歌論書・軍記物語・説話で、いわゆる「和漢混淆文」の文献が多い。一致度が高い群との差は約一〇%で、それほど大きな差ではないようにも見えるが、一致度が高い群の中で最も低い七七・三%(「宇治拾遺物語」と、一致度が低い群の中で最も高い七二・九%(「無名抄」と)との差四・四%は、両群の内部におけるどの差よりも大きく、落差の大きい段差になっており、両群を分ける目安として有効ではないかと考える。

この結果は、一見、文献の言語量と関連しているように思われ

る。すなわち、一致度が高いグループは、『宇治拾遺物語』を除くと、比較的言語量が小さい作品である。小さい作品だと、用いられる複合動詞のバリエーションの幅が狭くなるということか、とも考えられるが、その一方で言語量の少ない『水鏡』や『無名抄』は一致度が低いので、一概には言えないようである。

第二に、(表一)のA類、つまり平安時代の文献に用いられるものうち、文章ジャンルに注目すると、今回調査した文献は以下の三群に分けられる。まず、和文系統のもの。これは『唐物語』『方丈記』『無名抄』『今物語』『十訓抄』『撰集抄』が当てはまる。これらは、平安時代和文のみとの一致度(A②)が概ね二〇%以上であるのに対し、平安時代説話のみとの一致度(A③)は約四〜七%と低い。次に、説話系統のもの。これは『水鏡』『宇治拾遺物語』が当てはまる。これらは、平安時代和文のみとの一致度(A②)は一四〜一五%で、それほど高くない一方、平安時代説話のみとの一致度(A③)はそれぞれ一・二・五%、一四・八%である。そして、右のいずれにも当てはまらないもの。これには『平治物語』『古今著聞集』が当てはまる。以上を総合すると、『唐物語』の複合動詞語彙は、平安時代の文献に用いられる複合動詞語彙を基幹としつつ、和文寄りの複合動詞語彙を用いているといえる。この傾向は、成立年代が下る『今物語』でも同様であり、これらの作品が同じ文章ジャンルを形成している可能性が考えられる。<sup>(注一)</sup>

(表一)

撰集抄(13C後半)	古今著聞集	十訓抄	今物語	平治物語	無名抄	方丈記	宇治拾遺物語	水鏡	文 献			
									唐物語(12C後半)	①	②	③
290 (41.8%)	521 (40.1%)	419 (43.7%)	92 (54.1%)	179 (48.0%)	89 (41.6%)	30 (48.4%)	661 (48.2%)	142 (44.2%)	141 (52.8%)			
146 (21.0%)	236 (18.2%)	173 (18.0%)	36 (21.1%)	38 (10.2%)	57 (26.6%)	18 (29.0%)	195 (14.2%)	48 (15.0%)	54 (20.2%)			
39 (5.6%)	154 (11.8%)	65 (6.8%)	12 (7.1%)	33 (8.8%)	10 (4.7%)	3 (4.8%)	203 (14.8%)	40 (12.5%)	17 (6.4%)			
475 (68.4%)	911 (70.1%)	657 (68.5%)	140 (82.4%)	250 (67.0%)	156 (72.9%)	51 (82.3%)	1059 (77.3%)	230 (71.7%)	212 (79.4%)		小計	
219 (31.6%)	389 (29.9%)	302 (31.5%)	30 (17.6%)	123 (33.0%)	58 (27.1%)	11 (17.7%)	311 (22.7%)	91 (28.3%)	55 (20.6%)		B類	
694	1300	959	170	373	214	62	1370	321	267		合計	

(表二)

文献名	岩波大系 旧頁数	複合動詞 語彙 一致度
源氏物語	2118	66.2%
今昔物語集	1913	47.2%
宇津保物語	1356	67.7%
栄花物語	954	65.6%
狭衣物語	439	80.7%
夜の寝覚	358	77.9%
枕草子	290	70.2%
浜松中納言物語	288	73.1%
大鏡	251	81.0%
蜻蛉日記	219	76.1%
落窪物語	206	83.0%
大和物語	136	83.8%
伊勢物語	77	93.7%
紫式部日記	67	77.1%
堤中納言物語	65	86.4%
平中物語	56	88.2%
更級日記	56	89.7%
和泉式部日記	48	89.7%
竹取物語	39	79.0%
土佐日記	33	81.9%
梁塵秘抄口伝集	31	76.9%
篁物語	13	92.3%

### 三、「唐物語」の複合動詞の検討

#### 三・一 概観

先述の通り、「唐物語」の複合動詞語彙は異なりで二六七語、延べで三九二語であり、使用回数を平均すると一語につき約一・五回になる。いま便宜上、三回以上用いられるものを使用回数が多い順に並べると、以下のようなようになる。

#### 【九回】（一語）

A① あひみる（逢／相見・上二）

#### 【七回】（二語）

A① あかしくらす（明暮・四）・たちかへる（立返・四）

#### 【六回】（三語）

A① あひぐす（相具・サ変）・おはします（御座・四）・おもひしる（思知・四）

#### 【四回】（五語）

A① おもひとる（思取・四）・かくれるる（隠居・上二）・かへりみる（返見・上二）・たづねとふ（尋問・四）

A② とちこむ（閉籠・下二）

#### 【三回】（一四語）

A① うちみる（打見・上二）・うちわらふ（打笑・四）・うちあむ（打笑・四）・おもひいづ（思出・下二）・おもひやる（思遣・

四）・かきつく（書付・下二）・こひわぶ（恋侘・上二）・たえいる（絶入・四）・たづねもとむ（尋求・下二）

A② すみわたる（澄渡・四）・たちわかる（立別・下二）

B いどみいふ（挑言・四）・かくれまどふ（隠惑・四）・ほろほしうしなふ（滅失・四）

使用回数が多いものはほぼA①類で、平安時代の文献にジャンルの別なく用いられる複合動詞である。但し、使用回数が三回まで下がってくると、B類の複合動詞が散見するようになる。

#### 三・二 平安時代の文献に見られるもの——「あひぐす」の検討

前節の（表一）の検討から、「唐物語」の複合動詞語彙は和文的であると分析したが、A①類の中には平安時代の文献とは異なる様相を示すものがある。ここでは、使用回数が多いものから「あひぐす（相具・サ変）」を取り上げ、検討を加える。

平安時代の文献で「あひぐす」が用いられるものは『今鏡』（一例）『梁塵秘抄口伝集』（七例）『今昔物語集』（六五例）で、全七三例が見られる。いずれも平安時代も末期の作品であるという点に注意を惹く。以下、意味用法を分かち、用例を掲げる。

平安時代の文献における「あひぐす」

○「配偶者ト連レ添ウ」意（自動詞用法）

① 伏見の修理の大夫俊綱と聞えし人も、一つ腹におはしき。其

の御母は、贈二位讚岐守俊遠とあひ具し給へりければ、俊綱の君御子におはしけれど、けざやかならぬ程なりければにや、なを俊遠のぬしの子の定にて、橘俊綱とぞおはせし。(今鏡・ふちなみの上 第四・伏見の雪の朝)

この例は、「俊綱の母」が「俊遠」と連れ添っていたので、俊綱は俊遠の子としてあった、という例で、「あひぐす」は「配偶者ト連レ添ウ」という意味で用いられている。同じ意味用法の用例は他にはないが、「配偶者ヲ持ツ」という意味で用いられた例としては、以下の用例②～④が見られる。

○「配偶者ヲ持ツ」意(他動詞用法)

② 清経、目井を語らひて、相具して年比棲み侍けり。(梁塵秘抄

口伝集・卷第十七)

③ 此ノ女子、漸ク勢長ジテ十歳ニ余ヌ。母、此ヲ悲ミ愛スル事無限シ。傍ノ人モ、此ノ女子ヲ見テ不誉スト云フ事無シ。然レ

ドモ、家極テ貧クシテ、忽ニ夫ヲ令相具ル事無シ。(今昔物語

集・卷第四 第四十語)

④ 今昔、京ニ、父母モ無ク類親モ無クテ、極テ貧シキ一ノ女人有ケリ。年若クシテ形チ美麗也ト云ヘドモ、貧シキニ依テ、夫不相具シテ寡ニテ有リ。(今昔物語集・卷第十六 第九語)

以上、用例①～④は男女関係を表すものであるが、「あひぐす」にはそれ以外の用例もある。

○「一緒ニ付ク」意(自動詞用法)

⑤ 四五人・七八人、男女ありて、今様ばかりなる時もあり、常に在りし者を番におりて、我は夜昼相具して謡ひし時もあり、又我独り雑芸集をひろげて、四季の今様・法文・早歌に至るまで、書きたる次第を謡ひ尽くす折もありき。(梁塵秘抄口伝集・卷第十)

⑥ 様の歌など知らぬ多かり。とよりて、これら三四人具して習ひしかば、いと違はねど、各振は似ぬ所もあり。相具しては違はねど、各違へる異振も多かり。(梁塵秘抄口伝集・卷第十)

⑦ 安芸の巖島へ、建春門院に相具して参る事ありき。(梁塵秘抄

口伝集・卷第十)

⑧ 大師、其ヨリ紀伊ノ国ノ堺、大河ノ辺ニ宿シヌ。此ニ二人ノ山人ニ会ヌ。大師此事ヲ問給フニ、「此ヨリ南ニ平原ノ沢有リ。是其所也」。明ル朝ニ、山人、大師ニ相具シテ行ク間、蜜ニ語テ云ク、「我レ此山ノ王也。速ニ此ノ領地ヲ可奉シ」ト。(今昔

物語集・卷第十一 第二十五語)

用例⑤は、今様を謡うのに、他の謡い手は順番だが、後白河院自身はずっと謡っていたこともあった、という例である。用例⑥～⑧も同様の例である。

また、他動詞用法としては、以下の用例⑨～⑪がある。

○「引き連レル」意(他動詞用法)

⑨ 監物清経、尾張に下りしに、美乃国に宿たりしに、十三にてありし時、目井に具して罷りたりしに、歌を聞きて、「めでたき声かな。如何にまれ、未徹らむずることよ」とて、やがて相具して京へ上りて、目井やがて一つ家にとほしくて置きたりしに、：（梁塵秘抄口伝集・巻第七）

⑩ 今八昔、震旦ノ□ノ代ニ、都水ノ使者ニ蘇長ト云フ人有ケリ。武徳ノ間ニ、己洲ノ刺史ト為リ。然レバ、蘇長、妻子・眷属ヲ相ヒ具シテ彼ノ洲ヘ趣クニ、嘉陵ノ江ノ中流ヲ渡ル間、俄ニ風出来テ既ニ船没シヌ。（今昔物語集・巻第七 第二十九語）

⑪ 三蔵答テ宣ハク、「釈迦仏、涅槃ニ入給ヒニキト云ヘドモ、舍利ヲ遺シテ衆生ヲ導キ給ヘリ」ト。国王宣ハク、「然ラバ、其ノ舍利ハ相具シ奉レリヤ」ト。三蔵答テ宣ハク、「舍利ハ天竺ニ在マス。我レ不相具奉ズ」ト。国王宣ハク、「汝ガ云フ事、毎事ニ不当ザレバ我レ不信ズ。何ヲ以テカ舍利ノ有無ヲ知ラム」ト。三蔵答テ宣ハク、「舍利不具奉ズト云フトモ、折リ奉ラバ自然ラ出御スル者也」ト。（今昔物語集・巻第六 第四語）

用例⑨は、清経が目井を氣に入り、京都に連れて来た、という例である。用例⑩、⑪も同様の例である。用例⑪のように、人間以外のものを「持つテクル」という場合にも用いられる。

以上、平安時代の文献に用いられる「あひぐす」は、「配偶者ト連レ添ウ」、「配偶者ヲ持ツ」、「一緒ニ付ク」、「引き連レル」といっ

た意味で用いられている。これに対し、「唐物語」の「あひぐす」は、六例すべてが「配偶者ト連レ添ウ」という自動詞用法である。<sup>(三)</sup>「唐物語」における「あひぐす」

○「配偶者ト連レ添ウ」（自動詞用法）

① むかし梁鴻といふ人、孟光にあひぐしてとしごろすみけり。この孟光、世にたくひなくみめわろくて、これを見る人心をまどはして騒ぐほどなりけれど、この夫をまたなきものにしてかしづきうやまふ事思にもすぎたりけり。（第四語）

② 女がたの父、よろづのたからにあきみちて世のわびしきことをしらざりけり。か、れども、このわび人にあひぐしたる事をいと心づきなきさまに思とりて、いかにもむすめのゆくゑをしらざりけれど、露ちりくるしと思はでなん年月をすくしける。（第五語）

③ むかし徳言といふ人、陳氏ときこゆる女にあひぐしたりけり。かたちいとおかしげにて心ばへなど思さまなりければ、たがひにあさからず思かはしてとし月をふるに、思のほかに世中みだれて、ありとある人たかきもいやしきもさながら山はやしにかくれまどひぬ。（第十語）

用例①は、孟光が夫である梁鴻に大変よく仕えた、という例である。格助詞「ニ」を受けている。用例②、③も同様の例である。一方、格助詞を伴わない用例もある。

④ この夫、蜀といふ国へ行けるみちに、昇遷橋といふはしありけり。それをあゆみわたるとて、橋柱にものをかきつけ、り。「我大車肥馬にのらずは又このはしをかへりわたらじ」とちかひて、蜀の国にこもりにけり。その、ちおもひのごとくめでたくなりてなむ、橋をかへりわたりける。女、としごろまづしくてあひぐしたるかひありて、したしきうとき世中の人ぐもたぐひなくうらやみける。(第五話)

⑤ かくてとし月をふるに、あひぐしたりける女かぎりなくまづしきすまゐをたえがたくや思けん、「我もひともあらぬさまになりて、世をこゝろみむ」などこまやかにうちかたらひければ、「かくてしもやありはつべき。ことしばかり心つよくあひ念ぜよ」とよろづこしらへけれど、つゐにきかでそのとしのうちにはなれにけり。(第十九話)

⑥ (屠岸賈ハ) 失をもとめ、なき事をいひつけて罪にをこなはるべきよしをあるじにいひけれども、もちゐられざりければ、心中にいきどりをふかくてあかしくらすに、なを休めがたくやおほえけん、趙朔をはじめとして兄弟さながらほろぼしうしなひてけり。そのなかに、としごろあひぐしたりける妻なん、ひとりこのことにまぬかれにける。(第二十話)

用例④は、貧しい夫が出世するまで我慢して連れ添っていた甲斐があった、という例である。用例⑤、⑥も同様の例である。

『唐物語』の用例の分布は、平安時代の文献の意味用法のうち、「配偶者ト連レ添ウ」という意味しか受け継いでいないように見える。これは偶然ではないと考える。というのは、『唐物語』には単独の「ぐす」の用例が五例あるが、そのすべてが他動詞用法で「引キ連レル」という意味で用いられているからである。『唐物語』の作者において使い分けの意識があったものと考えられる。

『唐物語』における「ぐす」

① 鳳凰といふ鳥とびきたりてなむこれをき、ける。月やうやく西にかたぶきて山のはちかうなる程に、心やいさきよかりけん、簫史・弄玉ふたりのひとをぐしてむなしきそらにとびあがりぬ。(第十一話)

② けふばかりは御をくりにまいるべしといへりければ、かぎりなくうれしくおほえて、四人のひとをぐしつ、とう宮の御もとへまいりぬ。(第十七話)

③ この女、なにとなくすべきことありがほにもてなして、身したしき女房ひとりふたりをぐしてはしのつまどのうちにいりぬ。(第二十三話)

④ この王照君のかたちをなん見にくきさまになむうつしたりければ、えびすの王給てよろこびひらけつ、我くにへぐしてかへるに、(第二十五話)

⑤ か、れども、心つよくおもひたちにはければ、めのとこなりけ

るものひとりをぐくして、いづかたとなくうせにけり。(第二十七話)  
用例①は、簾を巧みに吹く簾史と妻弄玉が、鳳凰に連れられて昇天するところである。また用例④は、三千人もの女御・后を抱えていた漢の元帝が、夷の王に一人を与えることになり、誰にするか肖像画を見て決めようとしたところ、美人の王昭君が妬みのせいで醜く描かれていたので、王昭君が選ばれてしまい、夷の王は大変喜んで連れて帰った、というストーリーである。

このように、複合動詞「あひぐす」を、「配偶者ト連レ添ウ」という自動詞用法に用い、単独の「ぐす」を「引キ連レル」という他動詞用法に用いる、という明確な使い分けは、平安時代の文献には認められない。また、平安時代の文献では、受ける格助詞が「二・ト・ヲ(無)」と多彩であるのに対し、「唐物語」では「三・無」しか見られない。

このことを考察するために、鎌倉時代のいくつかの文献に用いられる「あひぐす」を、意味用法と受ける格助詞の観点から分類し、(表三)にした。表中、( )内の数値は「配偶者ト連レ添ウ」意で用いられるものの数(内数)を表す。この表を見ると、「唐物語」の「あひぐす」は、平安時代からの意味のうち、「配偶者ト連レ添ウ」意だけを選択して受け継ぎ、それを格助詞「二」を受ける形で自動詞的に用いていることがわかる。この拡大した用法は、「宇治拾遺物語」「今物語」、また中世王朝物語「小夜衣」にも見られる。

このことから、「唐物語」の複合動詞は、和文的性格をもちながらも、独自の様相を示す部分もあることが分かる。また、用例数が少なく確定的なことは言えないが、「今物語」との近似性が、ここにも表れていると考える。

さらに、鎌倉時代の文献に注目すると、「水鏡」「平治物語」「十訓抄」「古今著聞集」の四作品は「今昔物語集」の用例の分布とよく似ていることに気付く。この四作品は、(表一)の検討で、平安時代の文献との一致度が低いものに含まれていた。これが意味することについては今後の検討に俟ちたい。以下、鎌倉時代の文献に見られる「あひぐす」の用例を掲げる。用例①～④は「配偶者ト連レ添ウ」意(自動詞用法)の用例である。用例⑤～⑦は「一緒ニ付ク」意(自動詞用法)の用例である。用例⑧～⑩は「引キ連レル」意(他動詞的)の用例である。

鎌倉時代の文献における「あひぐす」  
○「配偶者ト連レ添ウ」意(自動詞用法)

① これも今は昔、源大納言定房といひける人のもとに、小藤太と云侍ありけり、やがて女にあひ具してぞありける。(宇治拾遺物語・第一四話)

② 小大進と聞こえし歌よみ、いと貧しくて、太秦へ参りて、御前の柱に書きつけける歌、

なまやくしあはれみたまへ世の中にありわづらふも同じ病をと



詠みたりければ、ほどなく、八幡の別当光清にあひぐして、楽しくなりにけり。(今物語・第二十七話)

③ かまへて人は情有べき事なり。かゝる心なかりせば、民部にあひ具してあさましき有様にてこそ過すべきに、かゝる情のふかゝりし事も、かくめでたきためしになるべきにこそ、とおほゆ。(小夜衣・下)

④ (妻帯シタコトヲ) 人にあまねく知らせんとて、家の門に、此女の頭にいだきつきて、うしろにたちそひたり。行通る人みて、あさましがり、心うがることかぎりなし。いたづら者になりぬと、人に知らせんため也。さりながら、此妻とあひ具しなから、さらに近づく事なし。(宇治拾遺物語・第一九四話)

○「一緒ニ付ク」意(自動詞用法)

⑤ 兄君、さらばとく我らが名をあらはし給ひてよ、とのたまひしかば、ふたりあひぐしてこほりのつかさの家におはして：(水鏡・第二五代 顕宗)

⑥ かたはらに僧ありていはく、「この地藏菩薩、はやう賀能ち院が、無間地獄におちしその日、やがてたすけんとて、あひ具ししていり給し也」といふ。夢心ちにいとあさましくて、「いかにして、さる罪人には具して入給たるぞ」と問ひ給へば、：

(宇治拾遺物語・第八二話)

⑦ 大監物藤原守光は、侍学生の中には名譽の物にてなむ侍け

る。嘉応年中に、むこ薩摩守重綱にあひぐして、彼国へ下りたりけり。(古今著聞集・卷第十五 宿執第二十三)

○「引キ連レル」意(他動詞用法)

⑧ かくて入鹿がくびをきるべきにてあるに、そのことを承りたる人ふたりながらおぢ恐れ、あせをながしてよらざりしかば、皇子そのひとりをおぢ給て入鹿がまへにすゝみよりて、その人をして肩をきらしめ給つ。(水鏡・第三七代 皇極)

⑨ 其間、近辺ノ小家ニカクシ置ケル郎等、四五十人ハハカリ出来テ、件ノ犯人ヲ相具シテ去ヌ。(十訓抄・第二)

⑩ 平治元年十二月四日、大宰大貳清盛ハ子息重盛相具シテ年籠ト心指、熊野「へ」参詣セラレケリ。(平治物語・上卷)

以上、「唐物語」における「あひぐす」について検討した。その結果、語形自体は平安時代から用いられるものであつても、意味用法に違いが見られる場合があることが明らかになった。今後は単独の「ぐす」との比較を行う必要がある。また、このようなバタンの複合動詞が他にもあるのかどうか、類例の発見と一般化に向けて個々の複合動詞について更なる分析を行う必要がある。

(表三)

文献／格助詞	今鏡	梁塵秘抄口伝集	今昔物語集	唐物語	水鏡	宇治拾遺物語	平治物語	今物語	十訓抄	古今著聞集	小夜衣	合計
ゝニ		1	1	3(3)		1(1)		1(1)		2	1(1)	10(6)
ゝト	1(1)					1(1)						2(2)
ゝヲ			34(4)		7		3		3	2		49(4)
無		6(2)	30(1)	3(3)	3	1	5		2	5		55(6)
合計	1(1)	7(2)	65(5)	6(6)	10	3(2)	8	1(1)	5	9	1(1)	116(18)

## 三・三 平安時代の文献に見られないもの

本節では、「唐物語」の複合動詞語彙のうち、平安時代の文献に見られないものについて検討する。(表一)にあるように、平安時代の文献に用いられない複合動詞は五五語あるが、このうち一〇語には、平安時代の文献に類似の複合動詞が見られる。以下にその一〇語を分類して列挙する(「せためとふ」は重出)。語の下に類似の

複合動詞とその複合動詞が用いられている文献名を記す。複数の用例がある場合、用例数も示した。

敬語が関係するもの

- ・いひくだす(言下・四)↓おほせくだす(今昔13例・打聞)・そ  
うしくだす(宇津保・寢覚)・まうしくだす(宇津保・今昔)
- ・ほめいふ(褒言・四)↓ほめまうす(栄花2例)(参考)ほめい  
ひいだす(枕)

新古関係にあるもの

- ・もれきく(漏聞・四)↓もりきく(源氏20例・寢覚10例・浜松・

狭衣・栄花2例・今昔2例・とり4例)

構成要素の順序が入れ替わっているもの

- ・せためとふ(責問・四)↓とひせたむ(落窪)

- ・ほろほしうしなふ(滅失・四)3例↓やきうしなひほろぼす

(狭衣)

構成要素の一部が類義の別語になっているもの

- ・うらみかなしむ(根悲・四)↓うらみかなしふ(三宝)
- ・かくしはぐくむ(隠育・四)↓かくしやしなふ(浜松)
- ・せためとふ(責問・四)※重出↓せめとふ(三宝2例・宇津保・今昔3例)

- ・たちきす(裁着・下二)↓たちきる(厳島・高倉・拾遺・堀河・

金葉(三))

・たちまはる(立回・四)↓たちめぐる(宇津保・源氏2例・寢覚・

浜松2例・今昔5例)

・ものいひゑむ(物言笑・四)↓ものいひわらふ(狭衣)

以上の四類のうち、「敬語が関係するもの」は、語形が一致して  
いなくても、セツトとなる敬語形が平安時代の文献に用いられてい  
るなら、平安時代の文献に用いられるものに準じて扱うことができ  
ると考える。したがって、「いひくだす」「ほめいふ」は、厳密には  
平安時代の文献に見られないものには含めないこととする。

また、「構成要素の一部が類義の別語になっているもの」につい  
ては、本稿では扱わない。類義関係の認定は、まずは単独用法の分  
析によって行われるべきなので、今後、単独用法の用例を検討して  
類義関係を確認し、その歴史の変遷を明らかにしてから、それが複  
合動詞の形成にどう関わっているかを考察したいと考えている。

以下、本稿では、右の二類を除き、残る「新古関係にあるもの」  
と「構成要素の順序が入れ替わっているもの」について検討する。

### 新古関係にあるもの

これに該当するのは「もれきく」の一語である。四段活用の「も  
る」から下二段活用の「もる」への移行が関係している。まず、用  
例を掲げる。

- ① 杵臼程豊といふ二人のつかはれ人、あるじを思ふふかけれ  
ば、ひとしれずかくしはぐ、みて、もしむまれたらん子おのこ

ならば、おやのかたきをも思しりなん、たゞいかにもして事な  
く人とならむことを思はからひけるを、かたきもれき、てめざ  
ましくなん覚ければ、なをたづねもとめてもそのあとをうしな  
はんと思へりけり。(唐物語・第二十話)

- ② さてかよひ給はむもさすがにすゞろなる心ちして、かるく  
しうもてひがめたと人もやもりきかむ、などつ、ましかれ  
ば、たゞむかへてむとおぼす。(源氏物語・若紫)

- ③ 「かばかりちかきほどに月ごろ侍に、をのづから、なめげな  
るありさまも、もりき、給ふらん。かしこまりとりそへて。け  
ふよき日にもありけり。かの御方にいま、でまいらぬよ、いと  
たいぐしきことなりや」とのたまひて、(夜の寢覚・巻一)

- ④ 近比、近江国かいづに、金といふ遊女ありけり。その所の沙  
汰の物なりける法師の妻にて、年比すみけるに、件法師、又あ  
らぬ君に心をうつしてかよひけるを、金もれき、て、やすから  
ずおもひけり。(古今著聞集・巻第十 相撲強力第十五)

- ⑤ はかなく秋にもなりぬれば、姫君は、御身かくれなきほどに  
見え給へば、宰相の乳母、少将などは、心ぐるしく見きこえ  
て、「さこそおぼしはぐ、み給ふとも、大殿などもれき、給  
ひては、つひにおほしめしうとまれたまはんずらん」と、心の  
ひまなくなげきぬたり。(あきぎり・上)

- ⑥ (参考)をのづからもりき、たる人もやなど、なべての世さ

へ、はづかしき心ちし給ひて、はる、よなき心地しながら、おはしつきたれば、いとゞさまかはりたるすまひも、心にもつきたまはず。(あきぎり・上)

用例①は「唐物語」の「もれきく」の例で、主君を殺された杵臼と程嬰という二人の家長が、主君の遺した子供を守り育てるが、仇がその存在を知り、抹殺しようとする、という場面である。「隠そうとしていた情報がどこから漏れ、それを相手を知る」という意味になる。用例②は「源氏物語」の「もりきく」の例で、光君が若紫を一気に二条院に引き取ってしまおうと考えるところである。この例は用例①の「もれきく」と同様の意味を表す。用例③、⑥も同様である。一方、用例④、⑤は鎌倉時代の文献の用例で、用例①と同様の意味で「もれきく」が用いられている。

中田(一九八三)の「もる」の項目の「語誌」欄には、下二段活用「もる」は四段活用の「もる」に比べてかなり遅れて現れる、とある。また、「秘密が他に知れる」意味の「もる」は、「源氏物語」以後、四段から下二段に移行する、ともある。<sup>註</sup>一方、複合動詞の構成要素としての「もる」は下二段化が遅れたようで、平安時代末期までは四段活用が一般的で、下二段活用はわずしか見られない。用例⑤、⑥に、中世王朝物語「あきぎり」の用例を掲げているが、用例⑤は「もれきく」だが、用例⑥(参考)は「もりきく」で、新旧両方の形が見られる。中世王朝物語は平安時代和文、特に「源

氏物語」や「狭衣物語」の影響を強く受けており、平安時代の語句や語法を規範的に用いようとする傾向があるため、古い語形である「もりきく」がまま見られる。

構成要素の順序が入れ替わっているもの

これに該当するのは「せためとふ」と「ほろほしうしなふ」の二語である。ここでは「せためとふ」について検討する。

① 「それはいかなることぞ」とたづねとひければ、ありのま、にいはんも心うくおほえて、なにかといひまぎらはすをしみてせためとひければ、あらがふべきかたなくて、「わが居所をさりげなくて時々み給へ」とをしふるを、あやしと思てその、ちつねにうかゞひみるに、うちたえでこの犬とふたりねたり。(唐物語・第二十七話)

② 文の返り事を、痴れたる物にて、懐に入れて持たりけるを、

此(の)少将の君の前に落したりければ、見つけ給ひて、委しく心づきたる君にて、「誰がぞ」と帯刀に問ひせため給ひければ、かくさで、しかくくと申(し)ければ、…(落窪物語・卷之二)

用例①は「唐物語」の「せためとふ」の例である。犬と契りをおわした女が、不審に思った女主人に問い詰められる場面である。次の用例②は「落窪物語」の「とひせたむ」の例である。帯刀が落とした手紙を、藏人の少将が見つけて誰の手紙か問い詰める、という場面である。用例①とは構成要素の順序が逆になっている。

用例②では「帯刀に」と格助詞「に」を受けており、「とひせたまむ」の前項「とふ」に意味の重点がある。後項の「せたまむ」は、前項の「問ウ」動作が厳しいということ、補助的に意味に加えている。一方、用例①の「せためとふ」は、当該箇所直前に「たづねとふ」が見られ、この場面が全体として質問しているという文脈上、やはり「とふ」に意味の重点があるとすると、前項の「せたまむ」はその意味を後項の「とふ」に副詞的に付加していることになる。平安時代の文献に見られる複合動詞で、「せたまむ」を構成要素に持つものは四語あるが、そのうち三語は後項にくるものである。<sup>(注)</sup>ここから、「せたまむ」の用法について、平安時代には複合動詞の後項として補助動詞的に用いられていたものが、鎌倉時代になると複合動詞の前項として副詞的に用いられるようになった、という仮説を立てることができる。

#### 四、おわりに

本稿で明らかになったことは以下の通りである。まず、一二世紀の中末期に成立したとされる『唐物語』の複合動詞語彙は、時代としては平安時代の文献に用いられる複合動詞語彙を基幹とし、ジャンルとしては物語・日記・和歌の文献寄りの複合動詞語彙を用いているということが分かった。

次に、「あひぐす」を取り上げた検討で、平安時代の複合動詞を

意識的に用い、明確な使い分けをしていることが分かった。この点で、和文的な性質を持ちながらも、独自の様相を示すものと言える。これについては、今後類例の検討に努めたい。

そして、平安時代の文献に見られないものの検討では、様々なパターンのものがあったが、歴史的な変化ということでは、「もりきく」から「もれきく」への移行が認められた。また、「せたまむ」の用法に関して、時代によって「せたまむ」を含む複合動詞の意味の重点が変化している可能性を指摘した。

#### (注)

- 一 『唐物語』について：一二世紀中末期（一一五一―一一八八ごろ）成立。作者は藤原成範か。長短さまざまな中国故事二十七篇を歌物語風に翻訳したもの。各話はいずれも「むかし」で始まり、必ず和歌を含む。典拠は『蒙求』『白氏文集』などであるが、単に故事をそのまま紹介するのではなく、意図的な改変が多く見られる。中国の故事を教養として習得しようとする女性のための作品。従来「説話」として扱われてきたが、「短編物語集」として捉えた方がふさわしい。以上、池田（一九八六）、小林（二〇〇三）を参考にした。
- 二 平安時代末期から鎌倉時代中期にかけて、『唐物語』や『古本説話集』（上巻）、『今物語』といった、和歌を含む短編物語集が相次いで編まれている。いずれも教養書としての側面を有しており、説話作品とも関連を持ちつつ、仮名文体の一ジャンルを構成している可能性がある。本稿の筆者は考えられている。
- 三 『唐物語』の用例は尊経閣文庫本（A類本）を用い、必要に応じて他本の本

文を参照した。

四 「語誌」欄の執筆者は岡村昌夫氏。

五 「いひせたまむ」（狭衣物語・古本説話集）、「とひせたまむ」（落窪物語）、「もみせたまむ」（狭衣物語）。「せたまむ」が前項にくるものは「せためおほす」（三  
宝絵詞）。

（参考文献）

- ・青木佶子（一九六五）『広本略本方丈記総索引』（武蔵野書院）
- ・池田利夫（一九七五）『唐物語 校本及び総索引』（笠間書院）
- ・池田利夫（一九八三）『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「唐物語」の項
- ・泉基博（一九八二）『十訓抄本文と索引』（笠間書院）
- ・小林保治（二〇〇三）『唐物語 全訳注』（講談社学術文庫）※『唐物語全  
釈』（笠間書院・一九九八）の文庫版
- ・境田四郎（一九七五）『宇治拾遺物語総索引』（清文堂）
- ・榊原邦彦（一九九〇）『水鏡 本文及び総索引』（笠間書院）
- ・坂詰力治・見野久幸（一九九七）『半井本平治物語本文および語彙索引』（武  
蔵野書院）
- ・鈴木一彦・鈴木雅子・村上もと（二〇〇五）『無名抄総索引』（風間書房）
- ・中田祝夫（一九八三）『小学館 古語大辞典』（小学館）
- ・東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明編（二〇〇三）『平安時代複合  
動詞索引』（清文堂）
- ・三木紀人（一九九八）『今物語 全訳注』（講談社学術文庫）
- ・峰岸明・有賀嘉寿子（二〇〇二）『古今著聞集総索引』（笠間書院）
- ・安田孝子・梅野きみ子・野崎典子・森瀬代士枝（二〇〇二）『撰集抄自立語  
索引』（笠間書院）

（追記）

本稿は、平成二〇年度広島大学国語国文学会における口頭発表をもとにま  
とめたものである。発表の席上等で松本光隆先生をはじめ多くの方から貴重  
なご意見を賜った。ここに記して深謝申し上げます。

— おかの・ゆきお、鳥取短期大学准教授 —